

2026年8月2日

説教題『命の息を吹き入れられ』創世記2：18～25 ～創世記①～

主任牧師 加藤 誠

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(創世記1章18節)

創世記1章は不思議な力に満ちています。混沌と暗闇に覆われた世界に光をもたらす神の言葉が持つ力。「はじめに神は天地を創造された…」。朗読してみるとその力が分かります。この創世記の語りかけを静かに受ける時、混とんと暗闇の中に生きる私たちの心に希望の光が射しこみ、そこに新しい命が起こされていきます。第二次世界大戦の時、強制収容所に収容され、いつガス室に送られるか分からない恐怖の日々を過ごしたユダヤ人たちは、毎晩カイコ棚のような粗末なベッドに体を横たえながら、暗闇の中でこの創世記1章の朗読を聞き、明日を生きる力を与えられ、希望の光に照らされました。神の言葉は、口から出たとたんに消えてしまう人間のはかない言葉とは違います。暗闇を歩く者を照らし、出来事を起こしていく「命の言」です。

使徒パウロは、この創世記1章を受けてこう語っています。「『闇から光が輝き出でよ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く栄光を悟る光を与えてくださいました。…このような宝を土の器に納めている私たちは…四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打倒されても滅ぼされない」(Ⅱコリント4：6以下)と。パウロは、この宝である神の言葉に生かされました。私たちは土のチリで造られ、最後にはまた次のチリに戻るはかない存在だとしても、この神の言葉によって私たちはどのような暗闇と困難の中においても、顔を上げ天を仰いで生きる者とされるのです。

創世記には、天地創造と人の創造、イスラエル民族の始まりとなった人々が紹介されていますけれども、そこに登場する人々は、けっして遠い昔の人々ではありません。今を生きる私たちの姿そのものです。いわゆる「聖人君子」は一人もいません。誰もが弱さと脆さを持ち、傷を抱え、苦悩の中に生きている生身の人間です。

「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう』」(2：18)。人は独りでは生きられません。ここで「合う」と訳されている言葉は「向かい合う」という意味であり、「助ける者」とは「根源的な助け」「それがないと生き延びることができない助け」という意味があります。例えば、私たちは自分の思いをぶつけられる相手、そして自分に応答してくれる存在を必要としています。自分の思いを言葉にしても、それが空中に消えて、どこからも返答がないとほど孤独なことはありません。赤ん坊は自分の泣き声、叫び声を聞いて反応してくれる存在なしに生きることができません。また、ある人は「彼に合う助け」のことを「向かい合い、双方の肩に棒をわたして、一緒に荷物を担ぐ相手」と説明しています。私たちは、人生の重荷を独りでは担ぎきれない。一緒に担ってくれる人、手を添えて支えてくれる人を必要とするのです。その究極の「助ける者」としてイエス・キリストは来てくださいました。「重荷を担う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげ

よう。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」(マタイ 11:28～29)。私たちは安心して、わたしの同伴者、主イエスに自分の重荷を委ねることができるのです。

今朝の創世記2章では、最初の男アダムは、神が造ってくださったエバを見出した時、歓喜の声をあげました。私たちにとって、喜びを共にし重荷を分かちあい一緒に歩んでくれる存在を与えられることは大きな大きな喜びだからです。ただ、そのようにして神さまの祝福と歓喜の中を歩み出したにもかかわらず、残念ながら次の3章でアダムとエバはあつという間にその大きな恵みを失います。肝心な場面で自分を守ることを優先し、相手を傷つけ、両手の隙間から零れ落ちるように神の恵みを失っていく二人。これは今を生きる私たちの現実です。結婚に限りません。いろいろな人間関係で、私たちはアダムとエバと同じことを経験します。人が抱える悩みと重荷の多くは人間関係と言われます。身の回りでも職場や学校でも、良き同労者を見出した時、私たちは歓喜にあふれますが、何かの拍子でその関係はあつという間に崩れてしまう。小さな傷が大きな亀裂となり、憤りと憎しみが生まれ、対立し決別していく。例えば野球のチーム。優勝したときにはお互いを称える言葉があふれますが、負けが込み始めると、今度は他人の責任を問い、非難する言葉がお互いを行きかうようになる。私たちは一緒に生きる誰かを必要としているのに、人と人とが「共に生きる」ということは何と難しいことでしょうか。

そのように深く傷つき、神から与えられたエデンの園を失い、労苦と汗に満ちた歩みに踏み出してくアダムとエバのために、創世記3章の終わりで神はそっと「皮の衣」(3:13)を用意されます。それはエデンの園を失った私たちを、それでも覚え続け、伴い続ける神の慈しみを象徴しているようです。例えば、イザヤ書 46:4 で神はこう語りかけています。「わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。あたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」。神は造られた責任を最後まで取られる方。どんな状況でも神は責任を放棄する方ではない。これが聖書のメッセージです。私たち一人ひとりを土のチリから造られ、命の息を吹き込まれた方は、最後まで責任を取る方として、私たちに語りかけ、祈り続ける方。同じイザヤ書 49:16 ではこう語られています。「わたしはあなたを忘れることは決してない。わたしはあなたを手のひらに刻みつける」と。口語訳では「わたしはたなごころにあなたを彫り刻んだ」と訳されています。「たな」は「手」を意味する古い日本語で、「たなごころ」は「手の中心」のこと。心や愛情があらわれる場所を意味します。私たちは神さまの心に大切に刻まれている存在である。刻まれた印はけっして消えません。わたしたちは神のたなごころに彫り刻まれた存在として、今日もこの礼拝に招かれているのです。「手のひらの中心に彫り刻まれた傷」。それは新約聖書を信じる私たちにとっては「主イエスの十字架の釘跡」と言い換えることもできるかもしれません。私たちは「共に生きること」の難しさに苦悩し、神から与えられた恵みを失い、自分の弱さや脆さに打ちのめされていることが多いとしても、しかし、その私たちがたなごころに彫り刻み、覚え続けてくださる神の慈しみの中にある。今日という日に、この方の命の息を吹き入れられて生きる者とされたいのです。